

神さまが用意してくださる道を探して

立教大学チャプレン 藤田 誠



イエスは言われた。「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない。(ヨハネによる福音書 14 章 6 節)

みなさま、この4月から立教大学のチャプレンに着任しました藤田誠です。これからどうぞよろしくお願いいたします。私は3月まで立教にとても近い目白聖公会で働いていました。そこでの日曜日の礼拝には立教大学のチャプレンが来て礼拝の司式をしてくださったり、目白聖公会からそれほど遠くないところで一時的に校舎を移転している立教小学校のあるクラスが目白聖公会の聖堂でクリスマス礼拝をお献げしたりと、立教は目白聖公会で働く私にとって身近な存在でした。実は立教中学校から大学まで立教にはお世話になったので、目白聖公会に関係なく立教は身近な存在だったのですが、大学卒業が約四半世紀前になるので、最近の立教を身近に感じていたというのがより正確な表現でしょうか。

立教中学校へ入学以来、私の歩みは想定外の出来事の連続とあってよいでしょう。まず、立教中学校へ入るまで、キリスト教とは無縁な世界で生きておりました。なぜ、自分が中学受験をしたのかと言えば、3つ上の兄が中学受験をしたからという理由だけでした。そして、なぜ、立教を受験したのかというと、算数と国語の二科目受験を実施していた学校の一つが立教だったからということだけです。しかも受験前の立教合格確率は塾の模試では半分行くか行かない程でしたので、受験前は立教中学校へ合格するとは正直思っていませんでした。しかし、受験したとき、模試とは異なり問題をサクサク解くことができてしまい、逆に塾の模試で合格率80%以上の学校は思ったより解答に苦戦をし、結果として、その学校は不合格で立教中学校は合格という奇妙な体験を経て立教中学校での生活がスタートしました。さらに付け加えるならば、立教の他に合格した

学校があり、そこが第一志望校だったのですが、受かる見込みのなかった立教中学校への合格の嬉しさと、黒の詰襟の学生服(通称学ラン)を着てみたかったという子どもらしい理由で立教中学校へ入学しました(母親には高校が新座で自宅の日吉から片道2時間だけど本当に良いのか?と何度も確認されましたが)。

立教中学校へ入学してからの驚きと言うと、始業と終業に学生によるお祈りが毎日あり、チャペルアワーでチャプレンから不思議な話を何度も聴き(「貧しい人々は幸いである」という字義通りには捉えづらい聖句や、「善いサムリア人」という「サムリア人」を嫌っていたと思われるある旅人が追いはぎに襲われた後、なんとその嫌っていた「サムリア人」に助けられるという今までの自分の価値観にはありえなかった話の数々)、立教の一貫連携教育の中で中学校受験以来、自分の中で自然にあった実学主義から「人間理解」へ心が向くような自分へ変えられてしまいました。そのような経緯もあり、大学ではキリスト教を高等学校の担任に勧められて進むことにしました。しかし、この時点で私は日曜日に教会へ行ってみようというマインドには至ってありません。教会には社会人になってから行くようになりました。それにはあるきっかけがありました。大学時代、私は月本昭男教授と小河陽教授のゼミを履修していました。よく周りから大学院へ進むつもりなのかと勘違いされました(当時、ゼミを2つ履修すると卒論提出を免除される規定がありました。この目論見も見事に崩れて卒論を書くことになりましたが、字数に限りがあるのでここでは控えます)。月本先生は当時、著名な旧約聖書の学者でしたが、学生の勉強や生活を気にかけてくださる教育者でもありました。旧約聖書学の最後のゼミの授業で月本先生はこのように学生たちにメッセージを送りました。「みなさん、社会人になると転職を経験

すると思います。そのとき、聖書を一冊持って行ってください。必ずあなたたちの助けとなります。」

私は大学卒業後、イタリアンレストランをチェーン展開している会社へ就職しました。東京勤務後、長野県の軽井沢店へ異動となりました。実家のある日吉を出るとき、私は月本先生のメッセージを思い出して、ポストンバッグの中に聖書を一冊入れました。軽井沢で私は初めて親元を離れて一人暮らしを経験するのですが、仕事の合間に聖書を一人で読む機会が増えました。そして、ふと、このような思いが自分の心の中に起きるのでした。「もしかして、聖書は一人で読むものではないのかぁ・・・」この思いが出て以来、休みが週に一度与えられる冬の閑散期に軽井沢にある教会を巡りました。そこで、通うようになった教会は店舗から徒歩数分のところにある日本同盟キリスト教団の軽井沢キリスト教会でした。日曜日が仕事なので、よく平日の祈禱会へ参加していました。すると、廣田具之牧師より「何人かで洗礼準備をしますが参加しませんか？」と声をかけられました。今思うと声をかけられたメンバーは諸事情で日曜日に教会へは行かれない人々でした。このようなメンバー構成なので洗礼準備は2年かかりました。そして、それぞれが洗礼の機会(つまり日曜日)を探っていました。しかし、当時の私は定休日以外に休みを取るのが無理だったので「廣田先生、よく考えましたが、やはり、日曜日に休みが取れないので洗礼は諦めたいと思います」と廣田先生へ申し出ました。すると廣田先生は「平日に洗礼式をしましょう」と声をかけてくださり、洗礼式には平日ではありましたが多くの教会の信徒たちが立ち会ってくれました。この経験も想定外でした。もし、自分が廣田先生の立場だったら、「平日に洗礼式をしましょう」と言えるだろうか?と今考えると、日曜日になかなか教会へ行かれない洗礼志願者のことを教会のみなさんに理解してもらうには大きなエネルギーを使うのではと想像します(「日曜日に教会へ来られるようになってから洗礼の機会をしましょう」と私は志願者へ言うてしまうのではないか...)

廣田先生はオフィシャルな教会の礼拝以外、例えば日曜日の早朝に私のために一緒に祈る機会をしばしば設けてくださいましたが、夏の軽井沢の繁忙期に私が日曜日の早朝に教会へ行く体力はほぼなく、閑散期ようやく日曜日の早朝に教会へ行くことができるという信仰の歩みを続けて参りました。年間の休みが50日無い生活が6年続いたので、そろそろ会社を辞めようと退社の意思を表明して、引き継ぎのスタッフを本社が探し続けて半年が経過したとき、会社は倒産して、私は実家の日吉に戻りました。

実家に戻り、新たな仕事を探しつつ、人工透析で自宅から病院への送迎に車が必要だった父の世話を家族の中で私が務めることになりました。その送迎で私は中原街道を使っていたのですが、時折、父のいる病院がある新丸子を越えて丸子橋を渡り少しドライブを楽しんで、旗の台のあたりでUターンして新丸子へ戻っていました。Uターンをした旗の台から車の左窓の外を見ると大きな横看板で「日本聖公会三光教会」と言う文字が見えて屋根の上に十字架の立つ聖堂が目に入りました。「ああ、ここは立教の母体である聖公会の教会なのかぁ。同盟の教会へ行く前に三光教会へ行ってみようかな」と思い、ある日曜日の夕方、三光教会の聖堂入り口をくぐると、ある牧師さんが「今から夕の礼拝がありますから、ご一緒にお祈りしませんか？」と声をかけてくれるのでした。その牧師さんのお名前は「ニコラス中川英樹司祭」でした。

何ということでしょうか、その中川先生と今、立教大学のチャプレンとして働かせて頂いているとは、やはり、想定外です。私は今、思います。おそらく、すべての人の歩みは神さまのお導きによって想定外の連続であると。その想定外の出来事に対して自分がどのようにレスポンスしていくのか?それを神さまはいつまでも待っていてくださるのだと。これから、みなさまとの想定外の出来事、それを心を落ち着けて待ち望みたいと思います。